





^{学長}横山俊夫

刊行にあたって

「なにか新しいことは?」——半世紀前の日本の或る大学研究室では、これが毎朝の挨拶であったと、当時そこにおられた老先生から聞きました。「新たな知」を求め、分かち合った日々を語られるお顔が印象に残ります。その分野は理論研究と現場応用にまたがり、おのずと学際的でした。本学が「知と実践」を理念に、文化政策・デザイン・地域という三方向の学びの融合に向かう今、このような回想は参考になります。

さて令和2/2020年度の本学教員特別研究費による研究と公開行事の活動は、新型コロナウイルス禍にあっても、手法の工夫により、新たな知見を生みだしました。7件の報告を掲げるにあたり、ご支援くださった方々に感謝申し上げます。

なお、本冊20ページ目からは、同年度出版の研究紀要掲載の18論文と 11研究報告の要旨を載せています。本学の研究活動のひろまりを見渡してくだされば幸いです。

じつは、2020年度は本学創立20周年にあたりました。それを記念して、 久しく電子出版方式であった研究紀要を、紙媒体でも出しました。この 紙の出版が1つの気付きをもたらしました。電子版なら、読者は各自関 心のあるテーマや著者名で個別論文だけを開くにとどまりがちです。 しかし冊子体となれば、おのずと様々な論文が目に入り、それらが専門 分野以外の人にもわかるように語られているかが見えてきます。本学紀要 にふさわしい総合編集のありようの検討が、森俊太副学長を中心に始 まったのは、この出版がきっかけでした。上記三方向の新知見がしかと 共有されるためにも、専門分野を越えて通じ合う言葉づかいを磨きたい ものです。この願いは、昨年の報告書の前書きに記した、両学部にまた がる新重点研究ビジョン「持続する社会のためのグローカルデザイン」 や滞在対話型施設[遠州学林]構想とも共鳴していることを申し添えます。



理事(教育研究担当) 高田和文

研究成果公表のための新たな方法に向けて

教員による研究活動の成果を広く公表することは、地域に根差した公立大学である本学にとって責務であると考えます。そのために、本報告書に研究成果を記録するとともに、年1回研究成果発表会を開催しています。加えて、大学の公式サイトからアクセス可能な学術リポジトリ等を通じて情報提供を行っています。また、地域の企業・団体との協働を具体化する目的で、本学教員の専門分野、経歴、研究テーマを網羅した「研究者総覧」を毎年発行しています。

昨年来のコロナ禍により大学は教育のみならず研究においても大きな 変革を迫られました。旅行や移動を伴う調査が困難になったことから、 計画が滞っている研究事業もあります。

さらに、本学が頻繁に開催してきた公開イベントやシンポジウム、セミナー等も通常の形では実施が難しくなりました。こうした状況の中で、本学はオンラインやWebを活用した事業の展開に積極的に取り組んでいます。例えば、公開講座や展覧会をWeb上で開催したり、研究成果発表会のオンラインでの視聴を可能にしたりしました。こうした取り組みによって、研究成果の公表や地域への情報提供、地域の人々とのコミュニケーションにおいて新たな可能性が生まれることを切に望みます。

Contents

<教員特別研究>

■ 音楽を介することによるリハビリ効果の検証デザイン学科 小浜 朋子 教授	P. 6
IT・LMSを活用した本学教育環境の研究	P. 8
文化政策学科 野村 卓志 教授	

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センターウェブサイトにも掲載しています。

< 教員特別研究報告> https://www.suac.ac.jp/researchcenter/research/specialresearch/

<イベント・シンポジウム>

■ 静岡県文化プログラム工芸展関連企画「先端技術展ー技人(わざびと)たちの物語ー」 デザイン学科 峯 郁郎 教授	P. 10
┃「Moving Text 一映画資料を読むー」	P. 12
デザイン学科 池田 泰教 講師	
■「科学」に関する啓蒙イベント	P. 14
デザイン学科 的場 ひろし 教授	
▼大学・大学生・若者による浜松市の中山間地域再生の可能性を考えるシンポジウム 「まちむらリレーション市民交流会議2021」 文化政策学科 舩戸 修一 教授	P. 16
文化政策子科 加口 廖 软技	
▼ メディアデザインウィーク2021 デザイン学科 長嶋 洋一 教授	P. 18

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センターウェブサイトにも掲載しています。

<イベント・シンポジウム> https://www.suac.ac.jp/researchcenter/research/event/

<研究紀要第21巻 要旨集>

○原著論文

○ 赤有端文	
■ 20世紀初頭の国際アヘン会議とイギリス領マレー諸州のアヘン問題	P.20
国際文化学科 崔 学松 准教授	
2020年度前期オンライン英語教育を振り返って一利点と欠点	P. 21
国際文化学科 ジャック・ライアン 教授	
┃ 近世遠江における親王由緒―木寺宮をめぐって―	P.22
国際文化学科 西田 かほる 教授	
ドイツにおけるミッテルシュタントの統治および経営にかんする研究	P. 23
│ 一ペリンガー社を中心に── │ 文化政策学科	
大阪市立大学大学院 経営学研究科 グローバルビジネス専攻 吉村 典久 教授	
「他出子」の出身集落への関わり意識─浜松市天竜区佐久間町のX集落の調査から─	P. 24
文化政策学科 船戸 修一教授	
ゲーム条例の憲法適合性一香川県条例を事例に	P. 25
文化政策学科 村中 洋介 講師	
西南戦争で陸軍が用いたラッパ信号と「喇叭暗号」を巡る混乱	P.26
芸術文化学科 奥中 康人 教授	
オペラ編曲家としてのタールベルク	P. 27
芸術文化学科 上山 典子 准教授	
博物館と大学の連携について	P.28
一浜松市博物館と静岡文化芸術大学の共同研究活動の成果報告を中心に— 芸術文化学科 立入 正之 教授	
江戸の名所三井越後屋から東京の名所三越呉服店への転換	P.29
芸術文化学科 田中 裕二 准教授	
劇場モデルに関する研究②	P.30
一劇場の近代化から引き継がれる日本型劇場プロデューサーの意義 芸術文化学科 永井 聡子 教授	

▍ 右脳の知覚におけるデッサン教育の効果	P.31
デザイン学科 伊豆 裕一 教授	
▌ コロナ禍における「コミュニケーションのユニバーサルデザイン」に関する考察	P.32
―SUACの学生レポートの分析から―	
デザイン学科 小浜 朋子 教授	
■ 畳みこみニューラル・ネットワーク(CNN)による絵本イラストレーションの画像認識	P. 33
デザイン学科 かわ こうせい 教授	
	P. 34
デザイン学科 高山 靖子 教授	
デザイン学科 迫 秀樹 教授	
	P. 35
デザイン学科 迫 秀樹 教授	
デザイン学科 高山 靖子 教授	
■ 描画による発想法の開発	P. 36
デザイン学科 羽田 隆志 教授	1 .00
授業における翻訳活動に関する日本の大学生の認識	P. 37
英語・中国語教育センター ニコラス・クーパー 特任講師	
ザッカリー・プライス	
○□索却生	
〇研究報告	
文化芸術イベントと多文化共生	P.38
一「デカセギ ブラジル」写真展、シンポジウム、交流コンサートの報告―	
国際文化学科 池上 重弘 教授	
芸術文化学科 立入 正之 教授	
デザイン学科 峯 郁郎 教授	
■ 浜松市のNPO法人の財政実態と事業収入の構造について	P. 40
国際文化学科 下澤 嶽 教授	
	P. 41
国際文化学科 鈴木 元子 教授	

国際文化学科の学生の履修・成績と進路:	P. 42
CAPと履修意識についてのアンケート調査をふまえて	
国際文化学科 永井 敦子 教授	
国際文化学科 高木 邦子 教授	
教務·学生室 金武 秀道 主査	
▶ 大学におけるケーブルテレビ番組制作の現在	P. 43
一「つくる」を通した地域ネットワークの構築に向けて 4つの事例からの報告	
文化政策学科 加藤 裕治 教授	
▍ 新しい島唄《懐かしい未来へ》が担う役割	P. 44
一世界自然遺産登録に向けた奄美大島の新たな試み―	
芸術文化学科 梅田 英春 教授	
┃ ユネスコ創造都市における国際音楽コンクール	P. 45
―ハノーファー、グラスゴー、浜松の事例―	
芸術文化学科 上山 典子 准教授	
芸術文化学科 高島 知佐子 准教授	
□ 伝統建築技術ワークショップの記録「和釘を打つ、和釘を使う」	P. 46
デザイン学科 新妻 淳子 准教授	
▶ 災害時に活用できる自転車の開発	P. 47
デザイン学科 服部 守悦 教授	
┃ EFLコースにおけるコロナ後のブレンド型学習は増加するべきか	P. 48
英語・中国語教育センター ダニエル・モタリ 特任講師	
┃ コロナ禍における静岡文化芸術大学の学生支援について	P. 49
教務·学生室 佐々木 哲也 主査	

研究紀要の全文は「静岡文化芸術大学学術リポジトリ」で閲覧できます。 https://suac.repo.nii.ac.jp/

※職位は令和2年度時点のものです。





「Uku-Mat」を用いた検証実験(左)と授業(右)

教員特別研究(重点目標研究)成果報告書 | 配分研究費:718千円(令和2年度)

音楽を介することによるリハビリ効果の検証

目的・概要

「音楽を介することによる効果の実証」に基づいたデザインを、グローカルに展開 することを目的とする。

佐野氏が開発した「Uku」を基に足踏みで演奏できるツールを制作し、実際に病院で患者を対象にして、音楽を奏でながら足踏み運動を行うことによるリハビリテーション効果(運動量と運動意欲の向上)の検証を行った。また「生活における音楽とのかかわり」を探求し、提案するデザインの展開ビジョンを明確にした。

期間 令和2年4月1日~令和3年3月31日

研究担当者 デザイン学部 デザイン学科 教授 小浜 朋子(研究代表者)

デザイン学部デザイン学科教授的場 ひろし名古屋工業大学非常勤講師佐野 芳彦デザイン学部非常勤講師竹中 裕人

スケジュール

令和2年4月~5月 「Uku」に接続するマットの試作の検討(佐野・小浜・的場)

令和2年6月~9月 「Uku」に接続するマットの制作:5セット(佐野)

令和2年10月~12月 患者を対象とした検証実験の準備と実施(竹中・病院スタッフ*・佐野)

「生活における音楽とのかかわり」 の研究(小浜)

令和3年1月~2月 検証実験の課題の整理と実験プロトコルの修正(竹中・病院スタッフ*)

令和3年3月 研究成果のまとめ及び継続研究の検討(小浜・的場)

*理学療法士の小河原 將央氏を中心にご尽力いただいた。

研究成果

1. 足踏みで演奏できるツール「Uku-Mat」の制作

佐野氏が開発した「Uku」を基に、安定して音楽が奏で続けられるように、センサーの配置やマットの柔らかさなどに検討を重ね、好みの楽曲を選択して等速の足踏みに合わせて演奏できるツール「Uku-Mat」を5セット制作した。

2. 「Uku-Mat」を使った検証実験の実施

倫理委員会の書類や同意書などを整え病院の承諾を得た上で、通常のリハビリテーションメニューの中に取り入れる足踏み運動の実験プロトコルを作成した。コロナ禍により患者が激減し、面会制限のために患者家族の研究同意が得られないなどの影響をうけ、実験は2名の途中で中止となった。未だ十分なデータは取れていないが、「座位での足踏み運動においては、運動量の向上と運動意欲の向上が期待できるのではないか」との手ごたえを得た。

3. 「生活における音楽とのかかわり」の探求

生活の中の音楽にかかわる様々なシーンを集め、緊張度と特別感を軸にマップ化した。少子高齢化が 進む今後の社会において「日常生活になじむ敷居の低い音楽文化」が「音楽を介して健康効果を高め るグローカルなデザイン」の大切なポイントになると方向づけた。



「生活における音楽とのかかわり」のマッピング

今後の研究成果の 還元方法

- 1. コロナ禍収束後、「Uku-Mat」を用いた実験プロトコルで検証実験を実施
- (1) あさい病院で、患者を対象に「座位での足踏み運動における運動量の向上と運動意欲の向上」 を検証し、学会で結果を発表する。
- (2) 静岡県内のデイケアで、利用者を対象に「日常の体操としての効果」を検証し、関係者と研究 結果を共有し、今後の活用について検討する。
- 2. 「生活における音楽とのかかわり」の研究を継続
- (1) 令和3年度の特別研究「日常生活における敷居の低い音楽の探求」にて、様々な専門家の視点を俯瞰し論著にまとめる。
- (2) 「日常生活における音楽を介した健康促進の可能性」を本学授業のテーマの1つとし、次世代の視点と提案を可視化する。



SUACmanabaのトップ画面

教員特別研究(その他研究)成果報告書 | 配分研究費: 1,340千円(平成30年度~令和2年度)

IT・LMS を活用した本学教育環境の研究

目的・概要 本学における IT および LMS を活用した教育環境の望ましい姿を明らかにし、その

実現方法を調査検討する。

期間 平成30年4月1日~令和3年3月31日

研究担当者 文化政策学部 文化政策学科 教授 野村 卓志(研究代表者)

文化政策学部 国際文化学科教授高木 邦子文化政策学部 芸術文化学科准教授中村 美帆デザイン学部 デザイン学科教授宮田 圭介教務・学生室副主幹原田 皓矢教務・学生室主査金武 秀道

スケジュール

平成30年5月 第9回教育ITソリューションEXPOに参加

平成30年7月 「Appleからの最新情報と、iPad導入事例校に学ぶ」参加、Apple社の製品及び

サービスに関する動向を調査

平成30年10月 SUAC manaba 教員マニュアルを印刷して冊子形態で配布

平成30年11月~12月 朝日ネット社「manamaユーザ会」に参加、普及のための調査

平成31年1月 講演会「学習支援システムmanabaの導入例と効果的な利用方法」開催

平成31年3月 respon教員用マニュアルを印刷して冊子形態で配布

SUAC manaba newsletter Vol. 1 発行

令和元年5月 第10回教育ITソリューションEXPOに参加

令和元年9月 講演会「LMSと著作権」開催

令和2年4月 SUAC manaba を用いてオンデマンド講義を行う資料の配布

令和2年11月 SUAC manaba newsletter Vol. 2 発行 令和3年3月 SUAC manaba newsletter Vol. 3 発行

研究成果

教育研究環境におけるITおよびLMSの活用を目的として、最近の動向を知るために2018年および2019年に第9回及び第10回教育ITソリューションEXPOを視察した。LMSの導入と利用はすでに珍しいものではなくなり、LMSの利用状況を分析して学生の動向を調べるシステム、学生の学修状況を分析するためのポートフォリオシステム、またLMSをさらに活用するためのビデオ配信や電子黒板などのシステムが提案されるようになってきていることがわかった。

2018年に導入したLMSであるSUAC manaba の普及を促進するために、学内向けの講習会、manaba の冊子体のマニュアル、manabaの付加機能であり講義中にリアルタイムで学生とやりとりするシステムである respon の冊子体のマニュアルを製作し教員に配布した。2018年及び2019年にはmanaba を運営する朝日ネット社の主催する「manabaユーザ会」に出席し、デジタル著作権の動向や、他大学におけるLMSの活用事例、普及活動について情報収集を行なった。また、講演会として2019年1月には東洋大学情報システム部の藤原喜仁氏による「学習支援システムmanabaの導入例と効果的な利用方法」、2019年9月には東洋大学法学部安藤和宏教授による「LMSと著作権」をFD委員会と共済で開催した。

2020年度は Covid-19の流行によって前期の講義開始が 1 ヶ月以上遅れ、原則として遠隔講義のみとなるなど、講義を巡る状況が大きく変化した。これに対応するために、SUAC manabaをオンデマンド 講義に活用するための手法と事例を学内に向けて周知した。2020年度の遠隔講義に向けての応急対応のために、LMSは有用なツールとなった。

今後の研究成果の 還元方法

研究成果は本学の紀要において発表した(『授業に関するアンケート』のweb実施における成果と課題(報告)、静岡文化芸術大学研究紀要 19)。また、SUAC manaba 普及を目的として、2018年10月にmanaba教員用マニュアルを印刷製本の形で製作し、教員に配布した。2019年3月には、respon教員用マニュアルを印刷製本の形で製作し、教員に配布した。2019年11月には、大学ICT推進協議会2019年度年次大会において、本研究の成果の一部を発表した(『Webページ上で動作するタッチタイピング練習プログラム』大学ICT推進協議会 2019年度年次大会論文集)。

また、2019年3月に、SUAC manaba 活用事例の周知を目的として SUAC manaba newsletterVol. 1 を発行し、印刷物を配布した。このニュースレターは、続報として2020年11月にVol.2、2021年3月にVol.3 を発行して最終号とした。

Covid-19 の流行により、教育環境におけるITの位置付けは大きく変化した。遠隔講義を実施する必要に迫られたことから、対面講義における教育の質を向上させるためのLMS活用の域を大きく超え、ビデオ会議を活用したリアルタイム形式の講義や、ビデオを活用したオンデマンド講義を検討し、さらに対面と遠隔の受講者の同時混在を可能にするハイブリッド講義に向けて環境を整備してゆく必要が生じた。LMSにとどまらず、広く教育のIT活用を検討推進する新たな枠組みが必要とされよう。



イベント・シンポジウム等実績報告書 | 配分事業費:480千円

静岡県文化プログラム工芸展の関連企画 「先端技術展一技人(わざびと)たちの物語ー」

目的・趣旨 オリンピック、パラリンピックイヤー、静岡県文化プログラムの!	的 . 趣旨	オリンピック.	パラリンピックイヤー.	静岡県文化プログラムの県域プログラムの
---	--------	---------	-------------	---------------------

一環で、2020年7月に本学で開催した工芸展の関連事業として、県内企業の先端

技術、ものづくりの現状を紹介する展示を行なう。

静岡文化芸術大学 ギャラリー

体制 (実施代表者) デザイン学部 デザイン学科 教授 峯 郁郎

デザイン学部 デザイン学科 教授 永山 広樹 文化政策学部 文化政策学科 教授 四方田 雅史

文化政策学部 文化政策学科 准教授 曽根 秀一

文化政策学部 芸術文化学科 教授 立入 正之 (制作協力) グラフィックデザイナー 静岡文化芸術大学 非常勤講師 星野 順啓

公益財団法人静岡県労働福祉基金協会 研究員 冨田 晋司

共催・後援等 (共催) 静岡県文化プログラム推進委員会

内容

東京2020オリンピック・パラリンピック連動、静岡県文化プログラムの一環としての県域プログラム、手の愉悦展一革新する工芸一の関連企画として、先端技術展、技人(わざびと)たちの物語として実施したイベント。

ディレクターの大岡 淳氏と企画内容を検討させていただき、「本学ならではの展示とは?」ということから学生たちによる企業取材を軸に、まず企業側視点でご推薦いただき、その方々の深掘り取材を通して、両学部の専門性を活かした目線で広く市民の方々にお知らせするというコンセプトで実施。企業の選定基準はショールームや工場見学コースを一般に公開しているメーカーを優先し、出来るだけ幅広い業種の取材を行ないたいという考えで進めた。











結果・成果

文化政策学部とデザイン学部はそれぞれ違った視点で世の中を考察し、実践的な学びを通して将来社会への貢献を目指している。今回それぞれの立場で取材を行ない、一般的な企業リサーチを超えた深掘りが出来たこと、機械化のイメージが先行する生産現場に手仕事が生きていること、よく知っているブランドに新しい発見があったことと同時に、一般的にあまり知られていないブランドに迫れたこと等々、ゼミで対応された教員、学生も含めて様々な発見と再確認が出来たと思われ、人脈、ネットワークの構築も見られた。今回構築出来た各地元企業の窓口となっていただける部署とのネットワークを活かし、今後の本学と地域、学びと実践との有機的な繋がりが更に盛り上がることに期待したい。





イベント・シンポジウム等実績報告書 | 配分事業費:400千円

「Moving Text-映画資料を読む-」

目	的		趣	듬
н	0.1	•	ALC: A	

本学所蔵の映画資料の特色を活かした映画資料展を企画し、1930年代から2000年代までの静岡県内の映画文化を資料を通じて考察し、これからの地域と映画文化のあり方と表現形態への理解を深める。

日時・場所

令和3年3月4日~令和3年4月6日 静岡文化芸術大学 ギャラリー

体制

(実施代表者) デザイン学部 デザイン学科 講師 池田 泰教 デザイン学部 デザイン学科 教授 的場 ひろし 文化政策学部 文化政策学科 教授 加藤 裕治 大学事務局 情報室 図書係 井出 直樹 図書係 大学事務局 情報室 土屋 麻子 デザイン学部 デザイン学科 実習指導員 博多 哲也 デザイン学部 デザイン学科 実習指導員 髙部 亘 デザイン学部 デザイン学科 実習指導員 根木 隆之

共催・後援等

(協力) 静活株式会社 静岡県立中央図書館

木下惠介記念館 (浜松市旧浜松銀行協会) 【指定管理者:浜松創造都市協議会・東海ビル管理グループ】 特定非営利活動法人トータルケアセンター 「浦岡敬一のシゴト部屋」

(什器設計) LAP (laplab.jp)

(制作協力) ファブラボ浜松テイクスペース

内容

本学に寄贈された映画資料を中心に、『Moving Text-映画資料を読む-』と題した 展覧会を実施した。「地域と映画文化」「映画パンフレットの世界」「制作の舞台裏」 という3つのキーワードをあげ、約120点の資料を選定し、木下惠介や浦岡敬一の 制作台本、1930年代の上映館プログラム、時代を象徴する映画パンフレットなど、 様々な媒体の資料を広く公開した。

また、展覧会会期中にはギャラリー前のスペースにて土肥悦子氏(シネモンド代表 / 一般社団法人こども映画教室代表理事)をお迎えして『ミニシアターでの経験とこども映画教室の活動』と題したトークイベントを行った。





結果・成果

本展は本学が所蔵する映画資料を用いた初めての展覧会であり、初公開となる資料群の研究・制作上の可能性を示す機会となった。展覧会には地域の方々をはじめ、全国から映画関係のアーキビストや研究者、制作者等が来場し、また、本学学生も多く参加した。特に「地域と映画文化」のセクションで展示された1930年代からの静岡市内での上映活動の資料群は、本学が立地する静岡県の映画受容の様子を窺い知ることができる貴重な展示機会を作ることができ、また、「制作の舞台裏」において展示された脚本群、特に編集者浦岡敬一の資料群については希少性も高く、その内容も、映画制作のプロセスを考察する上で重要なものであった。会期中にはより詳細をみたいというリクエストも多くいただくこととなり、本学の映画資料アーカイブの紹介としても機能していたと考えられる。

また、テキストだけの展覧会、というアイデアを実現した空間設計では、展覧会 什器と展示計画の両面で新たな試みを行い、図書館での資料閲覧体験とは別の展示 体験を実現することができた。

トークイベントについては、地域と映画文化の架け橋となる実践を数多くしてこられた土肥氏の報告に多くの参加者が刺激を受け、それぞれの映画文化に関わる実践について終了後も議論を続ける様子が見られた。これら一連の映画資料と展覧会活動をきっかけとして、映像産業振興機構(VIPO)が「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」に於いて作成している冊子『全国映画資料館録2020』に、本学図書館・情報センターが掲載された。







イベント・シンポジウム等実績報告書 | 配分事業費: 270千円

「科学」に関する啓蒙イベント

目的·趣旨

先端科学に関する啓蒙を目的とする、展示を中心としたイベントを平成30年度と平成31年度(それぞれの年度末に実施)に引き続き令和2年度に実施する。平成30年度のテーマ「電磁波(電波、光、放射線等)」、平成31年度のテーマ「視覚」と同様に、デザイン教育と関わりの深い科学の分野として、「照明・明かり」をテーマとして選定し、図書館の展示スペースを活用して、図表と書籍を中心とする展示を行うとともに、学外の専門家を講師として招くミニレクチャやワークショップ等を実施する。

日時・場所

令和3年3月31日~令和3年9月30日 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター内展示スペース

体制

(実施代表者) デザイン学部 デザイン学科 教授 的場 ひろし

共催・後援等

内容

照明・明かりの仕組みと歴史を整理した、横5.2 m、縦1.2 mの横長図表の掲示を中心とする展示イベントを実施した。図表の前のスペースに、関連する書籍約30冊(本学図書館所蔵の書籍及び個人蔵の書籍)を陳列し、館内で自由に閲覧できる状態にした。また、本学において科学の啓蒙的な展示を行う意義の説明と、様々な照明の基礎となる発行原理の説明のために、A1パネルを作成し、図表の左右のスペースに掲示した。

なおコロナ感染対策のため、令和2年度より図書館には一般利用者が入館できない状態が続いているため、本イベントの対象を本学学生と教職員に限った実施となった。またミニレクチャやワーショップ等の関連イベントの実施は現在見合わせている。







結果・成果

照明・明かりは、我々が日常生活で接している身近な装置・仕組みであり、また文化やデザインを考える上での重要な要素でもある。多くの学生が本展示に興味を持ち、陳列された書籍を手にする様子が見受けられた。本展示に関するアンケートからは「照明に興味が湧いた」「図表が見やすかった」「本学の授業では文系の分野の内容が多いが、今回の展示は理系の分野に触れる良い機会になった」等の意見が得られた。また今後は、令和3年度に実施するデザイン系の授業の内容に本展示と連携する要素を含めることで、授業の受講と図書館での学習を組み合わせた複合的な教育を構成する可能性についても検討していきたい。





イベント・シンポジウム等実績報告書 | 配分事業費:369千円

大学・大学生・若者による浜松市の中山間地域再生の可能性を考えるシンポジウム 「まちむらリレーション市民交流会議2021」

目的・趣旨

本学の学生(舩戸ゼミや「地域連携演習」である「引佐耕作隊」「佐久間耕作隊」の履修学生)や浜松市が2013年度から導入した浜松版の地域おこし協力隊である「浜松山里いきいき応援隊」による中山間地域における活動を紹介するとともに、このような大学生や地域外人材などの若者が一堂に会し、過疎が進行する浜松市の中山間地域の再生のために果たす可能性について議論する。こうして浜松の中山間地域づくりに本学が積極的に関わっていることを発信する。

日時・場所

令和3年1月23日 13時30分~15時30分 静岡文化芸術大学講堂(オンライン開催)

体制

(実施代表者) 文化政策学部 文化政策学科 教授 舩戸修一

共催・後援等

(共催) 浜松市役所 市民部 市民協働·地域政策課

内容



結果・成果

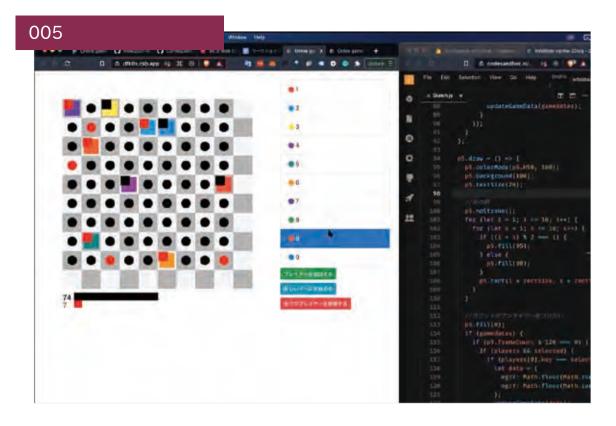
今回のシンポジウムの狙いは、以下3点ある。第1に、今後中山間地域を維持し ていくための地域づくりを構想することである。具体的には、人口減少下では 積極的な移住受け入れは必要だとしても、コロナ禍のため移住者を段階的に受け 入れる必要性を主張した。あわせて中山間地域の住民(祖父母)がリモート機器 を使って地域外の居住する子どもや孫と連絡を取っていく必要性も指摘した。 第2に、高齢化が進展する地域において「若者」が果たす可能性を発表すること である。具体的には、中山間地域に居住する移住者が都市住民を対象とした棚田 オーナー制度などの交流事業を展開し、若手農家が地元産野菜を地元で販売する ことによって地域住民同士のつながりを形成している実践例が報告された。こう した若者の活動が中山間地域の住民をエンパワーメントすることに貢献している。 第3に、このような浜松の中山間地域における活動成果を広く発信することであ る。当日のシンポジウムの動画は、YouTubeにアップされているため、当日参加 しなかった人も視聴することが可能である。当日参加者は200名以下であったが、 5月8日現在、1100人を超えている。動画配信によるシンポジウムであったため、 今後も視聴者数も徐々に増えていくと思われる。今後もオンラインを使えば、浜 松市だけでなく、全国に向かって本学による浜松の中山間地域への貢献可能性を アピールし、かつ浜松の中山間地域の問題解決に取り組む活動も発信することが できる。次年度も「まちむらリレーション市民交流会議」が果たす役割は大きい。











イベント・シンポジウム等実績報告書 配分事業費:450千円

メディアデザインウィーク2021

目的・趣旨

過去8年間に渡り継続的に実施した実績に基づき、「メディアデザインに関する教育」「地域社会への成果発信、文化振興」等を特徴とする複合型イベント「メディアデザインウィーク」を開催する。当該年度はデザイン学部が6領域からなる新体制の2年目として、さまざまな領域の活動内容を含めた形でイベントを再構築していく。

日時・場所

令和3年3月28日 オンライン開催

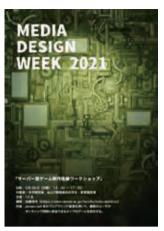
体制

(実施代表者)デザイン学部デザイン学部デザイン学科教授長嶋 洋一デザイン学部デザイン学科教授日比谷 憲彦デザイン学部デザイン学科教授かわ こうせい

共催・後援等

内容

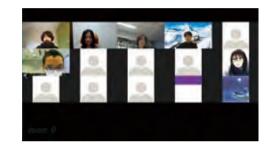
本イベントの令和2年度の実施形態について本学のコロナ対策会議に諮り、最終的には講師、参加者ともに完全に遠隔からの参加とするワーショップのみの形態とすることに決定し、3月28日の午後に実施した。ワークショップの参加者はサーバ型ゲームの原理について学び、自宅のPCを使って実際にサーバ型ゲーム(各参加者が行った操作の情報が一カ所のサーバに集められ、それらを反映した結果が各参加者に返る形式で進行するゲーム)の制作を体験した。ワークショップの最後には、参加者による制作内容の発表と、講師による講評が行われた。講師は、WEB系の技術を専門とし、サーバ型ゲーム制作の実績を持つ加藤明洋氏にお願いした。



結果・成果

下記の計14名が参加した。

デザイン学科1年生3名デザイン学科3年生1名デザイン研究科1年生1名文化政策学科1年生1名国際文化学科2年生1名国際文化学科3年生1名県内高校生3名



他大学大学院生(博士課程) 1名

一般の書籍やセミナー等で扱われることの少ない「サーバ型ゲーム」に関するワークショップは本学にとって新しい試みであった。参加者にとって、馴染みの少ないサーバ型ゲーム制作の考え方や新しい作業ツールに接することは新鮮な体験となり、意欲的に作業に取り組み、最後の発表では斬新な発想の制作物が見受けられた。一方で、ワークショップの内容に難しさを感じた参加者もあり、複雑な内容を多様な参加者に対していかに分かりやすく伝えるか、という点は今後の課題として残っている。総合的には、本学学生のみならず、高校生や他大学博士課程の学生も参加し、活発な意見交換や成果の共有を行うことができたことからも、コロナの時代の遠隔型ワークショップとして意義深い試みとなったと考えている。





20世紀初頭の国際アヘン会議とイギリス領マレー諸州のアヘン問題

Early 20th Century International Opium Conferences and Opium Issues in British Malaya

崔 学松 CUI Xuesong

文化政策学部 国際文化学科

Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

イギリス領マレー諸州政府のアヘン収入増加の背景には、主たるアヘン消費者である華人の流入があった。 1920年代には、世界的にアヘン禁煙運動が展開されて、これが政府収入の低減の遠因となった。本論文では、 華人労働者のアヘン吸煙理由として重労働の癒しと苦痛や疾患の治癒などを考察し、アヘン吸煙が貧窮の原因に もなったことを明らかにした。

Behind the increase in opium income for the British Malaya government was the influx of Chinese population, the main opium consumers. In the 1920s, an opium smoking cessation movement was launched worldwide, which was a cause of the decline in government income. In this paper, we considered the reasons Chinese workers smoked opium and found that they often did so to ease the pain of hard physical labor and for the healing of pain or illness; it was further found that opium smoking often caused poverty.

2020年度前期オンライン英語教育を振り返って一利点と欠点

Reflections on Online English Instruction in Spring 2020: Benefits and Drawbacks

ジャック・ライアン Jack RYAN

文化政策学部 国際文化学科

Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

Covid-19のパンデミックにより、日本の大学は2020年前期をオンラインで実施することを余儀なくされた。英語の教師は、必死の思いですべての資料をオンラインに移行してオンデマンドのコースを作成するか、リアルタイムでのオンライン授業を実施するかの選択を迫られた。本論文は、学生と教師の前期の経験を振り返り、検証する試みである。学生と教員の双方が調査とインタビューを受け、オンデマンドとリアルタイムの両方のオンライン英語教育の良い点と悪い点及び大学のCovid-19パンデミックの全体的な対応方法などについての振り返りを共有した。オンデマンド及びリアルタイムの指導についての多くの利点や欠点、さらに、大学の支援、特に学生への学術的支援と技術的支援の重要性が明らかとなった。

When the Covid-19 pandemic forced universities in Japan to conduct the spring semester 2020 online, English teachers were forced to frantically migrate all their material online and decide to make their courses either on-demand or conduct them in real-time at short notice. This paper is an attempt to reflect on the experience of both students and instructors. Students and instructors were both surveyed and interviewed and shared their reflections about benefits and drawbacks of both on-demand and real-time online English instruction as well as their university's overall handling of the Covid-19 pandemic. A number of benefits and drawbacks of on-demand and real-time instruction were found as was general agreement on the importance of university support, particularly technical and academic assistance for students.

近世遠江における親王由緒―木寺宮をめぐって―

The History of the Kideranomiya Royal Family in the Early Modern Era

西田 かほる NISHIDA Kaoru

文化政策学部 国際文化学科

Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

遠江国敷知郡入野村の龍雲寺は、後二条天皇の孫康仁親王を開基とする。康仁親王の子孫である木寺宮は戦 国期に入野村に居住し、戦国大名武田家に味方して徳川家と戦かったが、家康から龍雲寺を安堵されたという由 緒をもつ。ただし、その後木寺宮は断絶し、龍雲寺も住職がいない状況が続いたため、江戸時代の前期には木 寺宮の実態は分からなくなっていた。その様な中で、地誌の作成や幕府の古文書調査、明治期の陵墓調査など を通じて木寺宮の由緒が形成されていった。近世社会の中で木寺宮はどのように理解され、位置づけられたのか について、主に龍雲寺に残された史料を紹介しつつ考える。

Ryo-un-Ji Temple (龍雲寺) in Irino Village (入野村) in the Shikichi district of Totomi Prefecture was founded by Prince Yasuhito (康仁親王), grandson of Emperor Go-Nijo. Prince Yasuhito's descendent, Prince Kideranomiya (木寺宮), lived in Irino village during the Warring States period, and although siding with the warlord Takeda clan to fight against the Tokugawa clan, he was allowed by Ieyasu to maintain control over Ryo-un-Ji Temple. Soon after, however, the Kideranomiya family died out. During the early Edo period, Ryoun-Ji Temple had no chief priest, making the circumstances of the Kideranomiya family at this time unclear. Therefore, the history of the Kideranomiya family has been reconstructed through the creation of historical topograpies, an examination of documents during that period, and an investigation of mausoleums from the Meiji period. How the Kideranomiya family was understood and positioned during the early modern era will be discussed through an introduction of historical materials left at Ryo-un-Ji Temple.

ドイツにおけるミッテルシュタントの統治および経営にかんする研究 ―ペリンガー社を中心に―

Study on the governance and management of Mittelstand in Germany: Focusing on Perlinger

曽根 秀一 SONE Hidekazu

文化政策学部 文化政策学科

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

吉村 典久 YOSHIMURA Norihisa

大阪市立大学大学院 経営学研究科 グローバルビジネス専攻 Osaka City University, Graduate School of Business, Global Business Course

本論文の目的は、長期存続を果たしてきたドイツの同族性を持った中堅、中小企業であるミッテルシュタントに着目し、その統治および経営の特徴を見出すことにある。ミッテルシュタントはドイツ経済を支え、輸出志向かつ独自の技術能力を持ち得るものである。具体的事例として、1864年創業のペリンガー社(Ludwig Perlinger GmbH)をあげる。同社は、ドイツ唯一のなめし革製造企業であり、世界で最高峰のハイブランドとの間で活発に取引されるなど、海外輸出にも注力していることで知られる。このことは、ミッテルシュタントの特徴を示すものであろう。本論ではさらに、ドイツ・南バイエルンにおけるミッテルシュタントの継承方法、文化的な特徴を示すとともに、長期存続要因についても論じる。ドイツ企業の長寿性を明らかにする上でも本論文の役割は大きいと考える。

The purpose of this paper is to discover the characteristics of governance and management of Mittelstand, German small and medium-sized family companies that have achieved long-term survival. Perlinger is cited as a specific example. This company, which is the only German manufacturer of tanned leather, is also known for its commitment to overseas exports including active trading with the world's best high brands. This can be conceived as a characteristic of Mittelstand. Furthermore, this paper explicates the methods to inherit homes and businesses as well as cultural characteristics in South Bavaria, Germany, and discusses long-term survival factors in the region. This paper can play a major role in clarifying the longevity of German companies.

「他出子」の出身集落への関わり意識 一浜松市天竜区佐久間町のX集落の調査から―

Awareness of Involvement of "Children who have moved" to The Village of Origin: Survey of X Village, Sakuma Town, Tenryu Ward, Hamamatsu City

舩戸 修一 FUNATO Shuichi

文化政策学部 文化政策学科

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

昨今、人口減少や高齢化が進展する農山村地域では、65歳以上が占める割合が半分以上になった集落を「限界集落」と呼び、その消滅可能性を煽るような論調が見られている。しかし、集落の年齢構成にかかわらず、「集落から転出した子ども(以下「他出子」とする)」が実家や集落に通うことによって何かしらの生活支援を行えば、将来的な集落維持につながることを示す研究が提出されている。一方、このような研究は、集落に居住する親への調査から明らかにしたものであり、他出子への調査ではないため、その本人の出身集落へのかかわり意識は明らかにされない。そこで本稿では浜松市天竜区佐久間町のX集落を取りあげ、他出子の出身集落へのかかわり意識を明らかにし、今後の集落維持に向けての方策を説明する。

In recent years, while the population in rural areas is declining and aging, some comments fuel the possibility of the disappearance of socalled "marginal villages" where the proportion of people aged 65 and over is more than half. However, the studies have been submitted to show that it leads to future maintenance of the village regardless of the age structure if "children who have moved out of the village (hereinafter referred to as 'living-apart children')" provide some kind of life support by going to their parents' home and village. On the other hand, such studies were found out from the survey of parents living in a village, not from living-apart children. Therefore, it doesn't clarify their consciousness of the involvement in the village from which living-apart children come. In this paper, we will pick up X-village in Sakuma Town, Tenryu Ward, Hamamatsu City, clarify the consciousness of the involvement in the village from which living-apart children come, and explain the measures for maintaining villages in the future.

ゲーム条例の憲法適合性―香川県条例を事例に

The Constitutionality of the Ordinance of restriction on video games: Case of the Kagawa Prefectural Ordinance

村中 洋介 MURANAKA Yosuke

文化政策学部 文化政策学科

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

2020年4月に、香川県は子供のゲーム時間などを制限することを内容に含む条例を施行した。その背景には、「ゲーム障害」を病気として位置づけ、ゲーム依存症対策を行うべきだとする動きがある。ゲームやインターネットをすること、スマートフォンの利用などは本来人々にとって自由とされるものであるはずで、それを制限することは憲法上問題があるともいえる。香川県条例はそうした自由を制限する内容を含むもので、憲法上このような条例制定が認められるか疑問が残る。そのような中で施行された香川県の条例について、他の人権を制約する可能性のある条例との比較を通じて、香川県条例の憲法適合性について検討する。

In April 2020, Kagawa Prefecture enforced the ordinance that contained restriction on video game times for children. Behind that, there is a movement to position "game disorder" as an illness and shall be take measures against game addiction. Playing video games, using the Internet, and using smartphones are the freedom of the people, and limiting them is a constitutional problem. The Kagawa Prefectural Ordinance includes content that limits such freedom, and it is questionable whether such an Ordinance will be permitted under the Constitution of Japan. I consider the Constitutionality of the Kagawa Prefectural Ordinance through comparing it with other ordinances that may restrict human rights.

西南戦争で陸軍が用いたラッパ信号と「喇叭暗号」を巡る混乱

The confusion caused by "bugle sign": Focusing on usage of the bugle call in the Army during the Seinan War of 1877

奥中 康人 OKUNAKA Yasuto

文化政策学部 芸術文化学科

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、国立公文書館アジア歴史資料センターのデジタルアーカイブを用いて、西南戦争(明治十年)に関係する陸軍のラッパ信号の用い方を分析することを目的としている。同アーカイブを「喇叭」等のキーワードで検索し、抽出された約320件のデータは、楽器としてのラッパについて、ラッパ手について、ラッパ信号についてのデータに分類することができる。とくにラッパ信号を中心に分析を進めると、数多くのフランスのラッパ信号が用いられたことや、戦争が終盤となった9月になってから数曲のマーチを練習していたことが明らかになっただけでなく、「喇叭暗号」という特殊な用法が存在したことがわかった。

ラッパ暗号とは、あらかじめ定められたラッパ信号を問答形式で交わすことによって敵・味方を識別する用法である。しかしながら、資料から読み取れるのは、ラッパ暗号が記載された手帳や文書が敵の手に渡り、何度も改正を余儀なくされたという失態である。ラッパ暗号の運用には問題はあったものの、総じてラッパ手たちは数多くのラッパ信号を吹奏していたようであり、それまでのラッパ教育が順調であったことがうかがえる。

The purpose of this paper is to analyze the usage of the Army's bugle call related to the Seinan War of 1877, by searching the digital archive of Japan Center for Asian Historical Records, National Archives of Japan. Approximately 320 data extracted by searching the archive with keywords such as "Rappa" can be classified into data on bugles as musical instruments, bugle player, and bugle call. Focusing on the bugle call in particular, it is found that many French bugle calls and marches were used, and that there was a special usage called "bugle sign".

Bugle sign was communication for identifying an enemy or an ally by exchanging a predetermined bugle call in a question—and answer format. However, many records show that bugle sign and countersign fell into the hands of the enemy and had to be revised many times. Although there were problems with the operation of the bugle sign, the bugler generally played a large number of bugle calls, suggesting that the bugle education has been successful since the Meiji Restoration.

オペラ編曲家としてのタールベルク

Thalberg as Opera Transcriber

上山 典子 KAMIYAMA Noriko

文化政策学部 芸術文化学科

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

ジキスモント・タールベルク(1812-71)は19世紀を代表するピアノ・ヴィルトゥオーソ兼作曲家の一人である。 存命中にタールベルクが手にした演奏家としての名声を知る当時の人々は、彼がその後、「忘れられたヴィルトゥオーソ」と呼ばれるようになるとは、想像もしなかったに違いない。

本稿はタールベルクの作品群から、オペラに基づく編曲(オペラ・ファンタジー、変奏曲、パラフレーズ、そしてオペラのある特定の場面の編曲)の取り組みとそれらの出版譜、合計57曲に注目する。タールベルクの活動と並行するこれらの楽譜出版を年代順に概観することで、編曲史におけるタールベルクの特徴や貢献を考察する。その結果、彼のオペラの編曲の目的は、深淵でシリアスな芸術的作品を提供することではなく、ピアノでカンタービレに「歌う」こと、ピアノの楽器としての可能性を示すこと、そして音楽愛好家の耳に心地よい音楽を届けることであり、市民階級に対する啓蒙や教育的意図も少なからず含まれていたことが明らかとなるだろう。

Sigismond Thalberg (1812-71) is well known as a virtuoso pianist and composer in the 19th century, active in central Europe as well as in America. As a contemporary of Franz Liszt, he composed and published many opera paraphrases (such as opera-fantasies, -variations, -improvisations) and arrangements of certain scenes of operas. His brilliant success as a performer had made him extremely famous during his time, and people would have never imagined that he would be known as "forgotten virtuoso" in later years.

This paper focuses on Thalberg's opera-paraphrases and early editions of his days, chronologically reviewing the publications of these editions which amounts to 57 pieces, along with his activities as a traveling virtuoso. By examining his arrangements comprehensively, it becomes evident that his purpose of arrangement is not to compose the art work with great profundities and seriousness, but to "sing" with the piano and to please the general ear of music lovers as a whole.

博物館と大学の連携について—浜松市博物館と静岡文化芸術大学の 共同研究活動の成果報告を中心に—

Joint Research Project between Museum and University: Focusing on the example of research activities between Hamamatsu City Museum and Shizuoka University of Art and Culture

立入 正之 TACHIIRI Masayuki

文化政策学部 芸術文化学科

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

浜松市博物館と静岡文化芸術大学の共同研究について述べる。2020年は、新型コロナ・ウィルス禍の影響により、博物館と大学はともに参集が制限されるため、対面による研究活動は思うように進まないのが現状である。特に、研究場所への入構制限や研究員の移動制限は、共同研究において重大な問題となる。さらに、史料調査、実地調査、調査報告、学生指導などの研究員の人員分担、費用分担、作業分担、作業場所など、多くの点でも極めて高度かつ慎重な姿勢が求められる。これらは、博物館や大学の規模にかかわらず、一様である。本論は、浜松市に寄贈された学術資料の共同調査・研究、報告会に至る経緯をもとに、博物館と大学の共同研究の現状報告、今後の発展と可能性について述べるものである。

The joint research between Hamamatsu City Museum and Shizuoka University of Art and Culture will be described. In 2020, due to the impact of the covid-19, both museums and universities will be restricted from attending. Therefore, face-to-face research activities are not proceeding as expected. Especially, restrictions on admission to research laboratories and restrictions on the movement of researchers are serious problems in joint research. Furthermore, an extremely sophisticated and cautious attitudes are required in many respects, such as personnel sharing, cost sharing, work sharing, and work place for researchers such as historical materials surveys, field surveys, survey reports, and student instruction. This is the same condition regardless of the size of the museum or university. This paper describes the current status of joint research between museums and universities, and future developments and possibilities, taking the example of the joint research and study on the donated academic materials and the debriefing session.

江戸の名所三井越後屋から東京の名所三越呉服店への転換

From Mitsui Kimono Shop to Mitsukoshi Department Store: The Transformation of a Famous Edo-Tokyo Landmark

田中 裕二 TANAKA Yuji

文化政策学部 芸術文化学科

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

明治初期から後期にかけて、三井呉服店は業態のみならず建物を西洋風に改築して、三越呉服店(百貨店)へと生まれ変わった。本稿はなぜ三越に注目したのかという問いに答えるとともに、江戸から東京へと移り変わる中、様々なメディア、その中でも主に版画、絵葉書、双六などの史料を分析対象として、そこに描かれた越後屋、三越の姿から、近世と近代の東京と江戸の名所変遷を明らかにするものである。徳川将軍家の没落と共に旧時代に取り残されつつあった呉服店から百貨店へと転身を遂げ、少なくとも昭和初期頃まで、江戸の名所から東京の新名所へと転換することに成功し、その命脈を保つことができた。

From the early Meiji Edo Period to the end of the Meiji Era, the Mitsui Kimono Shop was reborn as the Mitsukoshi Department Store, a transformation that involved both a remodeled business format as well as the construction of a new Western style building to house the long-established company. By examining depictions of Mitsui and Mitsukoshi in historical materials such as woodblock prints, postcards, and suguroku (a popular Japanese board game), this paper considers how the changes undertaken by the Mitsukoshi Department Store played an important role in the transition of the city of Edo into modern Tokyo, particularly the evolution of famous landmarks and locations during this period. This analysis indicates that although the collapse of the Tokugawa Shogunate had rendered the Mitsui Kimono Shop old-fashioned, its transformation into the Mitsukoshi Department Store revitalized the location to become one of the preeminent attractions in Tokyo until at least the early Showa Era.

劇場モデルに関する研究②―劇場の近代化から引き継がれる日本型 劇場プロデューサーの意義

Research on Theatre Models II: Significance of Japanese-style Producers Inherited from Theatre Modernization

永井 聡子 NAGAI Satoko

文化政策学部 芸術文化学科

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本論の目的は、国や県などの行政の別を超えた「劇場」のあるべき姿を考察し劇場モデルを抽出することである。地域において劇場を拠点とした文化振興が観光に与える影響は大きなものとなることが推測される。劇場は基本的に建築空間のみを意味するものではなく、文化力、創造力、プロデュース力による総合力がなければ存在するこができない。日本の劇場の近代化に焦点を当てた論文"Modernization of theatrical space 1868-1940"が、Contemporary Theatre Review (2018) にて劇場を再定義したとして評価された。本論では、この論文の下地となった本論著者による『劇場の近代化―帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場―』(思文閣出版、2014) の3つの劇場が欧風化の過程で独自の選択をして劇場史のエポックとなったとの主張を踏まえながら、ハードウェアとソフトウェアの境界領域の中心で取り仕切る人材を「劇場プロデューサー」と設定し求められる役割を分析して、この人材と実演家や観客との関係性を総合的に捉える。

This thesis discusses the ideal form of a theatre that transcends distinctions between nation, prefecture and municipal administrations and explicates a model of the theatre based on the power of cultural promotion and its effect on tourism. The theatre is more than an architectural space; it is a cultural force, a creative force and a production force. In total, it is a comprehensive force. In "Modernization of theatrical space 1868–1940" as cited in the "Contemporary Theatre Review (2018), the author discusses the modernization of Japanese theatre and redefines its meaning. This paper discusses the evolution and the adaptations of the Imperial Theatre, Tsukiji Shōgekijō Theatre and the Tokyo Takarazuka Theatre and the roles of the actors, dancers and other artists. The above is examined through a detailed analysis of the meaning and role of the theatre producer.

右脳の知覚におけるデッサン教育の効果

Effect of Drawing Education on the Perceptual Ability of the Right Brain

伊豆 裕一 IZU Yuichi

デザイン学部 デザイン学科

Department of Design, Faculty of Design

子供は1歳半ほどから絵を描き始め、4歳になる頃には輪郭と数本の線で表現された人の顔を描くようになるといわれる。このように目で見たものを描画する能力は人類に共通したものであるが、やがてこの能力には個人差が現れ、多くの場合それは才能によるものと考えられてきた。一方、近年課題解決手法として注目されるデザイン思考では、仮説推論を行うための手法の一つとしてスケッチが推奨されるなど、描画行為の包括的な創造活動への活用が期待されている。これに対し、ベティ・エドワーズ博士により1979年に出版された『脳の右側で描け』は、目で見たものを描画する行為においては、描く技術よりも右脳による知覚が大切であり、それを実感できる方法として絵を倒立させて描く倒立描画を紹介している。

本研究は、知覚と描画の関係について知見を得ることで、描画行為の包括的な創造活動への活用に向けた研究の基盤とすることを目的とする。そのためにデッサン技法を習得しているデザイン学生とデッサン教育は受けていない人文学生に、正立と倒立、2種類の人の顔のイラストを描画させ分析した。その結果、人文学生の多くは倒立の方が上手に描けた一方、デザイン学生の多くに正立と倒立の差は見られず、描画教育が右脳による知覚に影響を与えることが示された。しかし、顔の印象の把握には他の要因が影響することも示唆された。

It is said that children start drawing when they are about one-and-a-half years old, and by the time they are four years old they will start drawing faces represented by contours and several lines. The ability to draw what you see is common to all humans, but this ability varies from person to person and is often attributed to talent. On the other hand, in design thinking, which has been attracting attention as a problem-solving method in recent years, sketching is recommended as a method for abductive reasoning and drawing is expected to be used for comprehensive creative activities. "Drawing on the Right Side of the Brain," published by Dr. Betty Edwards in 1979, explains that the perceptual ability of the right brain is more important than drawing skill and the book introduces a method of upside-down drawing as a practice to realize this.

The purpose of this study is to obtain knowledge about the relationship between perception and drawing and to serve as the basis for research aimed at using drawing for comprehensive creative activities. Design students who have mastered drawing techniques and humanities students who have not received formal instruction on drawing were asked to draw and analyze two types of illustrated human faces, upside down and right side up. The results showed that while many humanities students were able to draw better upside down, many design students did not show any difference in drawing ability between the two orientations, indicating that formal instruction on drawing affects the perceptual ability of the right brain. However, factor analysis also suggested that other factors influence the understanding of facial impressions.

コロナ禍における「コミュニケーションのユニバーサルデザイン」 に関する考察―SUACの学生レポートの分析から―

Consideration on "Universal Design of Communication" in the COVID-19 Crisis: From Analysis of the SUAC Student's Reports

小浜 朋子 OBAMA Tomoko デザイン学部 デザイン学科 Department of Design, Faculty of Design

コミュニケーションは、人間が社会生活を営む上で欠かせないものである。コロナ禍において"ステイホーム"を強いられ、大学は遠隔授業となり、私たちは、今までのように自由気ままなスタイルでコミュニケーションをとることができなくなった。皆が何の心得もないまま突然障害をもち、コミュニケーションをとらざるを得なくなったような状況である。ユニバーサルデザイン(UD)の観点から言うと、人間は心身機能に何か欠如が起こった際には、他の身体機能で補完してバランスをとりながら、時間をかけて適応していく。コロナ禍におけるコミュニケーションが人々に気づかせたことは、おそらく「コミュニケーションの本質」に通じる貴重なものではないかと考えた。

そこで、「コミュニケーションのUD」を「年齢、性別、身体能力、言語、コンピューターの操作リテラシー、環境や状況の多様性など、人の様々な特性に違いがあっても、誰もがストレスや疎外感なくコミュニケーションできること」と定義し、いくつかの授業でテーマにとりあげた。ここでは、学生の体験に基づいたレポートから現状と課題を分析し、「コミュニケーションに関わる大切な要件」を考察している。

Communication is indispensable for human beings to lead a social life. In the COVID-19 crisis, we were under "STAY HOME" and university classes were changed to distance learning, making it impossible to communicate in a free style as before. The situation was such that everyone suddenly had a disability without any knowledge and was forced to communicate. From a universal design (UD) perspective, when there are mental and physical problems, humans balance, complement other functions, and adapt over time. I think that what communication in the COVID-19 crisis made people aware of is probably a valuable link to the "essence of communication."

I defined "UD of communication" is "Everyone can communicate without stress or feeling of alienation, even if there are differences in various characteristics of people such as age, gender, physical ability, language, computer operation literacy, and diversity of environment and situation," and I took up this theme in some my classes. Here, I analyze the current situation and issues from the student's reports which based on their experience, and consider "important requirements for communication".

畳みこみニューラル・ネットワーク(CNN)による絵本イラスト レーションの画像認識

Image recognition of illustrations in children's books by CNN

かわ こうせい KAWA Cosei デザイン学部 デザイン学科 Department of Design, Faculty of Design

畳みこみニューラル・ネットワーク(CNN)の「再発見」により、AIの画像認識能力は飛躍的に向上している。本研究では、人工知能(AI)が絵本イラストレーションの余白をどの程度認識できるのか検証する。CNNは、絵本イラストレーションをどの程度認識できるのか確かめるため、ボローニャ国際絵本原画展入選作品およそ200点を対象として、余白についてディープ・ラーニングによる教師あり学習を実施し、未学習の絵本イラストレーションの余白を識別できるか検証した。その結果、CNNによる画像認識は、絵本イラストレーションにおいても有効であることが示唆された。

The "rediscovery" of convolutional neural networks (CNNs) has dramatically improved AI's image-recognition capabilities. In this study, the author examined how much artificial intelligence (AI) can recognize the blank space of picture book illustrations. At first, the CNNs learned the blank spaces of 200 selected artworks for "The Illustrators Exhibition" in "Bologna Children's book Fair" by supervised deep learning. Next, the CNNs were examined if they could identify the blank spaces in unlearned illustrations. As a result, it was suggested that image recognition by CNN is also effective in picture book illustration.

浜松市の事例調査に基づく高齢者のフレイル予防に関する実態分析 1

Fact-finding Analysis on the Prevention of Frailty in Elderly People based on the Survey in Hamamatsu City: Part 1

高山 靖子 TAKAYAMA Yasuko

デザイン学部 デザイン学科

Department of Design, Faculty of Design

迫 秀樹 SAKO Hideki

デザイン部 デザイン学科

Department of Design, Faculty of Design

世界最長寿国である日本では、増加する社会保障給付の負担が深刻な問題となっており、高齢者の自律的な生活を維持するためのフレイル予防が注目されている。フレイル予防には、「栄養」「身体活動」「社会参加」の3つの柱を「うまくリンク」させることが重要であると言われている。しかし、その具体的な手法については各自治体が手探りで取り組んでいる状況である。そこで本研究では、「うまくリンクさせる」手法の解明を目指し、まず、健康づくり教室などを通じて直接高齢者に接する地域行政の関係者への聞き取り調査を行った。次に、行政機関の公的資料による量的データと先行研究の文献とこの聞き取り調査の内容を比較して考察を行った。その結果、公開されている量的データと聞き取り調査による高齢者のコミュニケーション像には異なる点が見られた。また、健康づくり教室の受講者がある固定層に偏っていることがわかったため、本稿では、多くの高齢者にフレイル予防の意識を浸透させるためには、3つの柱を「うまくリンク」させることと同時に、リンクに取り込む「きっかけづくり」も重要であると結論付けた。

The Prevention of Frailty that contribute on maintaining independent living of elderly people attracts attention in Japan, because burden of social security is becoming one of the serious problems due to the longest life expectancy in the world. Effective link among the three keys: "physical activity", "nutrition" and "social participation" is important to frailty prevention. Each local government attempts to it through trial and error. Therefore, at first, aiming to develop the method for the effective link, the interviews with officers from the local government who manage the Health Enhancement Programs were conducted. Secondly, comparing the quantitative data from available public sources opened by the national government organization with the interview is discussed. As a result, authors found different image of the communication of elderly people between the quantitative data and the contents of the interview. In addition, it is revealed that the participants in the program was biased to a certain group. Thus, it is resulted that making opportunities to involve another elderly people into the link together with making effective link among the three keys is important.

浜松市の事例調査に基づく高齢者のフレイル予防に関する実態分析2

Fact-finding Analysis on the Prevention of Frailty in Elderly People based on the Survey in Hamamatsu City: Part 2

迫 秀樹 SAKO Hideki

デザイン学部 デザイン学科 Department of Design, Faculty of Design

高山 靖子 TAKAYAMA Yasuko

デザイン学部 デザイン学科

Department of Design, Faculty of Design

フレイル予防に繋がる方策を検討するために、健康づくり教室へ通う高齢者に対してアンケート調査を実施した。アンケート用紙を配布したのは、浜松市の健康づくり教室に参加している高齢者と、その比較対象として文系サークルで活動をしている高齢者の2グループである。その結果、健康づくり教室に参加している高齢者は、体力維持や健康を保つという意識を持ち、普段から散歩やラジオ体操も行っていた。文系サークルの参加者は運動や健康に関する意欲はあるが、運動の量や種類は少なそうだった。また普段の情報源は、どちらのグループでもテレビや新聞といった既存のメディアから得ることが多く、スマートフォンを含むインターネットの利用は少なかった。これから高齢者がスマートフォンなどを情報機器として活用することが徐々に浸透していくと予想されるが、フレイル予防に繋がる情報をいかに伝達できるかが重要となるだろう。

A questionnaire survey was conducted with elderly people attending health enhancement programs to examine the measures that could lead to the prevention of frailty. The questionnaire was distributed to two groups: a group of elderly people who participated in a health enhancement programs in Hamamatsu City and another group of elderly people who participated in a cultural circle for comparison. Results showed that the aged people who participated in the health enhancement programs were conscious of maintaining their physical strength and health, and were routinely doing walking and radio gymnastic exercises. The participants in cultural circle appeared to have motivation for exercise and health, but were doing smaller amounts and fewer types of exercise. Both groups usually obtained information from existing media such as television and newspapers, and the use of the Internet, including smartphones, was less. The use of smartphones and other information devices is expected to gradually become widespread among elderly people. In this situation, it will be important how information leading to the prevention of frailty can be transmitted to them.

描画による発想法の開発

Development of idea method by drawing

羽田 隆志 HADA Takashi デザイン学部 デザイン学科 Department of Design, Faculty of Design

デザイン作業において発想の展開は極めて重要である。通常、ブレインストーミングなどの手法を用いて発想の 展開を行うが、必ずしもメンバー全員が会話によるコミュニケーションに適性があるわけではなく、会話が苦手なメ ンバーの発想が埋もれてしまうなどの欠点もある。そこで私はこの欠点を補うために、ブレインストーミングとは異 なる結果を得ることのできる発想法として、会話に依存せず描画で行う発想法を開発し、これを「ブレインドローイ ング」と命名した。

The development of ideas is extremely important in design work. Usually, ideas are developed by using techniques such as brainstorming. However, not all members are good at communicating with each other by conversations, and in such case, the ideas of members unsuited for conversations become buried. In order to complement this drawback, I created an alternative idea development method, namely "Braindrawing". It is capable of generating results different from ordinary brainstorming, and is practiced by drawings without relying on conversations.

授業における翻訳活動に関する日本の大学生の認識

Japanese Student Perceptions of Translation in the Classroom

ニコラス・クーパー Nicholas COOPER

英語・中国語教育センター

The English and Chinese Language Education Center

ザッカリー・プライス Zachary PRICE

本稿は、中・高等学校の授業における翻訳活動に関して、日本の大学生の意見を明確にすることを目的とする。そのため、本稿では、大学生の個人経験に基づく意見および1年生と2年生の回答を分析する。分析によると、翻訳は授業で過剰に使用される手法としてみなされているが、同時に効果については肯定的に捉えられていることが示唆される。1年生と2年生の回答において、大学授業での教授を1年間受けた2年生は、翻訳活動が英語会話の上達に有益であるという考えが薄れる傾向にあり、概念の変化が示唆される。更に本稿では、前述の差異を除いては1年生と2年生の回答におおむね相違がない点について、大学における教授法が、英語を科目ではなく言語として捉える大学生の概念の変化に影響を与えている観点から考察する。

This paper aims to highlight and elaborate on the perceptions of translation and its use in secondary school classrooms by students at a small liberal arts university in Japan. It explores student opinions on their personal experiences with translation, as well as compare responses between first and second year students. This paper suggests that students view translation both positively and it being used too much in their secondary school classrooms. The paper suggests a moderate potential shift in conceptualization between first and second year students, where after a year of English instruction at a university, students were less inclined to believe that translation was useful for conversation. Additionally, this paper offers suggestions on why there were otherwise little significant differences between first year and second year responses, mainly that a shift from viewing English as a subject and English as a language coincides with a shift in classroom pedagogical focus.

文化芸術イベントと多文化共生 - 「デカセギ ブラジル」写真展、シンポジウム、交流コンサートの報告—

Cultural Arts Events and Intercultural Community Building: A Report on "Dekasegui Brasil" Photo Exhibition, Symposium and Cross-cultural Exchange Concert

池上 重弘 IKEGAMI Shigehiro

文化政策学部 国際文化学科

Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

立入 正之 TACHIIRI Masavuki

文化政策学部 芸術文化学科

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

峯 郁郎 MINE Ikuro

デザイン学部 デザイン学科

Department of Design, Faculty of Design

本稿は、2019年度に静岡文化芸術大学で開催されたイベント『「デカセギ」の30年、過去から未来へ〜写真展、シンポジウム、交流コンサート〜』についての報告を通じて、文化芸術イベントが多文化共生推進に資する可能性を考察することを目的とした。企画の背景、各イベントの実施に向けた経緯を述べた上で、イベントの実施内容について詳述し、さらにその成果と意義をまとめた。

日系ブラジル人労働者やその家族について、自らも「デカセギ」労働者だったブラジル人写真家のマエダ氏が30年間に撮りためたモノクロ写真90点は、一般の日本人はなかなかうかがい知ることができない日系ブラジル人の就労や家族生活を生きと伝える作品となっていた。

シンポジウムでは日系人の就労が合法化されてからの30年の足跡をたどり、変化した点と変化していない点をめぐって議論した。変化した点としては、永住志向の高まり、日本社会への貢献意識の高まり、日本社会で専門職や総合職として活躍する第二世代の登場等が指摘された。一方、変化していない点としては、不安定な工場就労、受け入れ社会側の意識、日本で暮らす普通のブラジル人の功績や本音が紹介されない点が指摘された。

交流コンサートでは日本であまり知られていないブラジルの音楽が紹介された。ステージ最後のオリジナル童謡では、日本人の子どもたちとブラジル人の子どもたちが互いの言語も交えて合唱した。これは多文化共生の理念 を具現化する機会となった。

文化芸術イベントは多文化共生の前提となる受け入れ社会側の意識変革に重要なインパクトを与えうる。定住化がすすむ中、子どもたちが交流するイベントは未来の多文化共生への「種まき」とも表現できる。

This paper reports on the event "30 years of " Dekasegui", from the past to the future-photo exhibition, symposium, cross-cultural exchange concert-" held at Shizuoka University of Art and Culture in 2019, and aims to explore the potential that cultural and artistic events have to promote of intercultural community building.

After describing the background of the project and the implementation process of each event, the details of the events were described, and their results and significance were summarized. Ninety black-and-white photographs lively depict the working situation and daily life of Japanese Brazilian workers and their families, which are rarely known by ordinary Japanese people. The photos were taken over 30 years by a Brazilian photographer Maeda, who also used to be a "Dekasegui" worker himself.

At the symposium, we traced the footsteps of 30 years since the legalization of employment of Nikkei, and discussed what has changed and what has not changed. The following points have changed: the growing tendency toward becoming permanent residence, the growing awareness of contribution to Japanese society, and the emergence of the second generation who are active as professionals and general managers in Japanese society. On the other hand, the points that have not changed are as follows: unstable factory employment, and the lack of awareness of the host society toward migrants. It was also pointed out that the achievements and true intentions of ordinary Brazilians living in Japan have not been introduced.

At the cross-cultural exchange concert, Brazilian music, which is not well known in Japan, was performed. In the original nursery rhyme at the end of the stage, Japanese children and Brazilian children sang together in their own language as well as in each other's languages. This became an opportunity to embody the idea of intercultural community building.

Cultural arts events of a minority group can have an important impact on the change of consciousness on the part of their host society, and that impact is a prerequisite for intercultural community building. As the settlement progresses, an event where children on both sides interact with each other can be symbolized as "sowing seeds" for future intercultural community building.

浜松市のNPO法人の財政実態と事業収入の構造について

The Current Status of Finance and Business Income of NPOs in Hamamatsu city

下澤 嶽 SHIMOSAWA Takashi

文化政策学部 国際文化学科

Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

静岡文化芸術大学の教員特別研究費を得て、2018年度に「浜松市のNPO団体の自己資金と行政資金の関係性の調査」を実施した。本調査では、2006年から2014年までの公開されている9年間の浜松市のNPO法人235団体の財務諸表に関する情報を取得し、それらの収入状況をデータベース化して分類し、NPO法人の自己資金と行政資金の関係、事業収入、特に自己事業収入がNPO法人に与える影響を、ヒヤリング調査を行って、自己資金や自己事業収入の割合が高い組織の運営状況などの調査する予定であった。新型コロナ等の影響で、NPO法人への詳細なヒヤリングを実施できず、研究は停止状況にある。したがって、データベースの情報が古くなる前に、分析結果だけでも公表しておく必要を感じ、本報告としてまとめた。

The author conducted a study entitled "The research on relationship between NPOs' own and governmental financial resources in Hamamatsu" in 2018. It was funded by the grant of Shizuoka University of Art and Culture. Based on 235 NPOs' financial documents dating from 2006 to 2014, it yielded a database of the NPO's financial resources, a primary categorization of NPOs, and their analysis. The original plan was to interview a group of NPOs with a high ratio of own financial resources and income earning projects, but due to COVID-19 infection, such interviews were interrupted and it is still not clear when the research resumes. Thus the author decided to disclose the analytical results in this report before the information in the database becomes outdated.

今、ソール・ベローを読む面白さとは:遠藤周作と比較して

Capturing public imagination when reading Saul Bellow in the present : Let's read him with Japanese writer Shusaku Endo

鈴木 元子 SUZUKI Motoko

文化政策学部 国際文化学科

Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

ソール・ベローとほぼ同世代の遠藤周作とを比較する。アイデンティティの葛藤、フランス留学、病い、アウシュヴィッツ訪問、弾圧などの観点から論を進めていくと、ソール・ベローの『サムラー氏の惑星』と、遠藤周作の『沈黙』が、両作家のホロコーストへの応答であることがわかる。

Although Saul Bellow and Shusaku Endo seem dissimilar, they have several commonalities: They experienced conflicted religious identity, studied in France, suffered a serious childhood or adolescence illness, and visited Jerusalem and Auschwitz. Furthermore, they have both met Holocaust survivors in Paris, which made an impression on them. A detailed analysis of Bellow's Mr. Sammler's Planet and Endo's Silence reveals that these works may be a response to the Holocaust. This is similar to Erie Wiesel's Night in response to the father who in death called his name.

国際文化学科の学生の履修・成績と進路: CAPと履修意識についてのアンケート調査をふまえて

Results of the CAP-System:

The relationship between grades and post-graduation employment

永井 敦子 NAGAI Atsuko

文化政策学部 国際文化学科

Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

高木 邦子 TAKAGI Kuniko

文化政策学部 国際文化学科

Department of Intercultural Studies, Faculty of Cultural Policy and Management

金武 秀道 KIN Hidemichi

事務局 教務・学生室

Educational and Student Affairs Section

本稿は、1年前の研究報告「国際文化学科学生の履修動向と意識: CAP制導入後の学生を対象としたアンケート結果を中心に」(静岡文化芸術大学研究紀要vol. 20)に引き続き、このアンケート調査の対象となった学生たちの進路状況を合わせて、学科の学生たちの学びの特徴を明らかにしようとするものである。個別事例を扱わず、卒論の提出状況、留学経験の有無、進路の種類別といったグループ分けによって傾向分析をおこなった限りでは、明確な特徴を引き出すに至らなかった部分が多い。しかし、本学においては、このような成績状況と進路と履修意識を結びつけた分析として初めての試みであろう。この報告をきっかけに、大学として教育効果をいかに捉えるべきかの議論が進むことを期待したい。

This paper follows up on previous research, reported in the SUAC Bulletin, vol. 20, on course registration behavior under the CAP system (which sets the upper limit of credits a student can register for each semester) and its relationship to the grades of students in the Department of Intercultural Studies at Shizuoka University of Art and Culture. Supplementary data was added, including job hunting prospects, experience studying abroad, GPA and credits acquired. The results show no discernable relationship between GPA and awarded credits and indicators such as thesis submission, experience studying abroad, and type of employment taken after graduation. However, this research is considered to be in the early stages and yearly data collection and analysis is expected to continue in order to determine any significant educational effects within the department, and by extension, the university as a whole.

大学におけるケーブルテレビ番組制作の現在
―「つくる」を通した地域ネットワークの構築に向けて 4つの事例からの報告―

Current Cable TV Program Production at University: Toward the construction of a regional network through "creating programs"considered in four cases

加藤 裕治 KATO Yuji

文化政策学部 文化政策学科

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

地域とメディアをめぐる研究では、地域の各アクターがメディア情報の受け手であると同時に送り手であり、その活動を通して地域のネットワークが形成される過程を論じてきた。このアクターには大学も含まれることは従来から指摘されてきたが、その役割や機能についてはこれまであまり明示的に論じられてこなかった。本研究では、大学学生によるケーブルテレビ番組制作の実践について調査することで、学生がケーブルテレビ番組を「つくる」行為が、大学や地域に与えている影響を考察する。

Researches on relationship between the region and the media have depicted the process by which each actor in the region is both a receiver and a sender of media information, and through their activities, the regional network is formed. It has long been pointed out that these actors also include the university, but its role and function have not been explicitly discussed so far. This study investigates the practice of cable TV program production by university students, and considers the effect of the act of students "creating" cable TV programs on the relationship of the university and the community.

新しい島唄《懐かしい未来へ》が担う役割 一世界自然遺産登録に向けた奄美大島の新たな試み―

The Role of the New Shimauta (Island Song) 'Natsukashii mirai e' (Nostalgic future): Amami Oshima's New Attempt to be Certified as a World Natural Heritage Site

梅田 英春 UMEDA Hideharu

文化政策学部 芸術文化学科

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

政府は2017年「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の一部を世界自然遺産候補地としてユネスコ本部に推薦した。さまざまな問題から政府は翌年には推薦をいったん取り下げたものの、2019年に再申請をしている。一方、奄美大島では、島外のブランディングで進行してきた世界自然遺産登録へ向けての島民の認識が薄く、登録後の観光振興の中で、奄美の自然環境の変化と伝統文化の衰退を危惧する声が高まっていった。その中、奄美大島の地方行政の一機関である奄美大島自然保護協議会が、2018年に奄美の唄者、アーティストにより創作された新しい「島唄」を通して、奄美の自然や文化に対する意識向上、そして世界自然遺産登録へ向けての機運醸成の事業「唄島プロジェクト」を立ち上げた。本報告書では、そのプロジェクトの中で創作された新しい島唄《懐かしい未来へ》が、世界自然遺産登録に向けた島民の意識向上にどのように寄与してきたのかを明らかにしたい。

In 2017, the Japanese government recommended parts of Amami Oshima, Tokunoshima, Northern Okinawa Island, and Iriomote Island to UNESCO Headquarters as candidates for World Natural Heritage sites. The government withdrew its recommendation the following year due to various issues but reapplied in 2019. However, the islanders on Amami Oshima were not aware of progress of the World Natural Heritage registration due to branding occurring off the island. In addition, with the promotion of tourism after registration, the changes in Amami's natural environment, and the decline of traditional culture, the number of concerned voices has noreased. Among these is the Amami Oshima Nature Conservation Council, which is one of the local administrations of Amami Oshima. The council raised awareness of Amami's natural and cultural resources through a new shimauta (island song), which was created by Amami singers and artists in 2018. The council then launched the Utashima Project to encourage registration as a World Natural Heritage Site. In this report, I clarify how the shimauta 'Natsukashii mirai e' (Nostalgic future) created by the project has contributed to raising the awareness of the islanders regarding World Natural Heritage registration.

ユネスコ創造都市における国際音楽コンクール 一ハノーファー、グラスゴー、浜松の事例—

International Music Competitions in the UNESCO Creative Cities of Music: Case Studies of Hanover, Glasgow and Hamamatsu

上山 典子 KAMIYAMA Noriko

文化政策学部 芸術文化学科

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

高島 知佐子 TAKASHIMA Chisako

文化政策学部 芸術文化学科

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

こんにち世界の各地で、芸術祭や音楽祭、フェスティバルなどさまざまなイベントが開催されているが、これらの多くは、地域との関わりや地域文化の一部として企画、運営、実施されている。学問領域においても、芸術祭や音楽フェスティバルなどと、地域の文化、住民、経済とのかかわりに注目する研究は珍しくない。一方で、音楽コンクール(とくに国際音楽コンクール)は音楽文化の向上や若い才能の発掘といった、いわゆる「純音楽的」目的を開催理念に掲げるものが多く、地域社会との共生や地域文化への貢献といった視点から、コンクールの運営を考察したり評価したりする研究はほとんど行われてこなかった。

本研究は、日本において国際音楽コンクールが存続、発展していくための環境づくりに必要な条件を問いながら、これまで注目されてこなかった地域で国際音楽コンクールを開催する意義を浮かび上がらせ、両者の相互発展の可能性を考察する。地方都市でありがなら、2つの国際音楽コンクールが開催されている浜松市に着目し、浜松市、並びに浜松市と産業構造等が似た海外都市のコンクールを調査することで、地域で国際コンクールを継続していくための条件とその意義を明らかにする。

Today, numerous artistic events such as art festivals, exhibitions, music festivals, concerts are held in various parts of the world, and many of these are planned and carried out in order to promote regional culture, or to vitalize the local communities. In the field of academic study, a considerable number of studies have been devoted to examine the relationship among art festivals and local culture, residents, and economy. On the other hand, researchers seem to have paid less attention to the music competitions, especially "international" competitions, normally considered to have the commonly called "purely musical" purpose, such as discovering young talent and help to launch international careers, or improving artistic standard. In fact, little research has been done to consider or evaluate the competition from the perspective of ontribution to local society.

This paper focuses on the provincial city of Hamamatsu, where two international music competitions are held, by comparing the competitions in foreign cities with similar industrial structures to Hamamatsu, namely Hannover and Glasgow, and discusses the possibility of mutually beneficial relationship between the competitions and community.

伝統建築技術ワークショップの記録「和釘を打つ、和釘を使う」

Report on the Workshop of Craftsmen Technique in Traditional Japanese Architecture "Forging and Hammering the Japanese Nail"

新妻 淳子 NIITSUMA Junko デザイン学部 デザイン学科 Department of Design, Faculty of Design

本学デザイン教育において、伝統建築・伝統工芸を継承してきた匠(技能者)の技術の理解と協働についての研究を推進してきた。その過程で、2018年度に実施された「伝統建築技術ワークショップ」から「匠」・「研究者」・「デザイナー」を「つなぐ研究」の重要性が確認された。そこで2019年度は、「和釘を打つ、和釘を使う」という、鍛冶が和釘を鍛造しそれを大工が建築に使用するまでの一連をワークショップとして実施することとした。匠による技術連携を組み込んだことで、ものづくりの現場の一端を見ることができた。総括として行った座談会「伝統建築と鍛冶」では、「ものづくりの繋がり」の中において未来へ継承・創造すべきことなどが語られた。また、本学のデザイン教育において、本物に触れて匠との共通言語を得る実践的な学びの機会を伝統建築に関する授業の中で設けるという挑戦をしている。本稿は、伝統建築研究者の立場からワークショップを技術的に記録すると同時に、本学のデザイン学科において実践した教育活動について報告するものである。

In the design education of SUAC, we have been promoting research on understanding and collaborating with the skills of craftsmen who have inherited traditional architecture and traditional crafts. The 2018 Workshop of Craftsmen Technique in Traditional Japanese Architecture confirmed the importance of "connect Research" by "craftsmen", "researchers", and "designers". In 2019, a series of workshops "Forging and Hammering the Japanese Nail" were held. In those workshops, blacksmith forged Japanese nails and carpenters used them for building. By incorporating technical cooperation by craftsmen in the workshops, we were able to see a part of the manufacturing site. In the summary round—table discussion entitle as "Traditional Japanese Architecture and Blacksmith", we discussed what should be inherited and created for the future in the "connection of manufacturing". In the design education of SUAC, practical learning opportunities are set up in the class of traditional Japanese architecture to acquire a common language of craftsmen by touching the real things. This report is meant to technically record the workshops from the standpoint of a traditional Japanese architecture researcher, and also to report the educational practice in the Department of Design, SUAC.

災害時に活用できる自転車の開発

Development of a bicycle that can be used at the time of disaster

服部 守悦 HATTORI Moriyoshi

デザイン学部 デザイン学科 Department of Design, Faculty of Design

東日本大震災を機に各地で大規模災害発生を想定した防災対策が進んでいる。一方で、災害発生直後の生活 について考える機会は少ない。

それを踏まえて、前年度、浜松市の助成金を活用し、災害発生後の物資等運搬用の自転車を試作した。今回、 その試作車を被災地へ持ち込み、検証結果を盛り込んで改良型の製作を行った。

Having learned about the importance of preparedness from the Great East Japan Earthquake, disaster prevention measures are currently being undertaken in various regions around Japan in anticipation of the next large-scale disaster. However, not enough consideration has yet been given to managing daily life immediately after a disaster has occurred. Therefore, last year, using a subsidy offered by the city of Hamamatsu, we developed a prototype bicycle that can be used to transport supplies in the aftermath of a disaster. This time, the prototype was trialed in disaster-stricken areas. Based on the results from the trials, improvements were made on the final model.

EFLコースにおけるコロナ後のブレンド型学習は増加するべきか

Increasing Blended Learning in Post-Covid-19 EFL Courses

ダニエル・モタリ Daniel MORTALI

英語・中国語教育センター

The English and Chinese Language Education Center

本稿は、複数の方法を使ったアプローチを利用し、学生の基礎的なコンピュータ技術能力、それらの向上意欲、外国語としての英語学習(EFL)に更なるブレンディッド・ラーニングを望むかどうかを調査した。日本の小規模な大学の72名の学生を対象に、それぞれ2種類のアンケートとインタビューを行った。Covid-19の世界的流行の中、教育機関がソーシャル・ディスタンスやeラーニングに急遽取り組まざるを得ない時期にそれらを実施した。また、学生の中にはそれまで英語授業や学習にコンピュータを使用したことがない者もいた。このように突然、授業でコンピュータ技術を使用しなければならなくなったことから、Covid-19の流行が収まった後も学生たちがブレンディッドの授業を続けていくことを望んでいるのかという疑問が生じ、今回の研究課題を設定した。本稿では、ブレンディッド・ラーニングの言語学習における効果とともに、その概念や一般的な効果について論じる。アンケートとインタビューの結果は、学生は自らのコンピュータ技能向上に興味を持ち、同様にEFLコースにおけるブレンディッド・ラーニングの利用にも関心があることを示唆している。

This paper investigates, using a mixed methods approach, students' basic technological capabilities, willingness to improve those capabilities and whether or not they would want to have a more blended learning English as a foreign language (EFL) experience. Two surveys and two interviews were administered to 72 students at a small liberal arts college in Japan. The research was done in the midst of the Covid-19 global pandemic when educational institutions scrambled to implement socially distanced, e-learning style courses for students. Some of the students had never used technology or computers to this extent in their courses before. This sudden implementation of technology in classes was the premise for the research question, "will students want to continue the use of technology in a more blended setting after the Covid-19 pandemic has subsided?" The concept of blended learning and its general effects are discussed as well the effects it has in language learning. The results suggest that students are interested in improving their technological capabilities as well as interested in increasing the use of blended learning in EFL courses.

コロナ禍における静岡文化芸術大学の学生支援について

About the student support of Shizuoka University of Art and Culture in the COVID-19 crisis

佐々木 哲也 SASAKI Tetsuya

事務局 教務・学生室

Educational and Student Affairs Section

2020年の新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19と略記)の感染拡大を受けて、静岡文化芸術大学(以下、本学と略記)では、学内の感染拡大防止と構成員の安全確保のため、大学構内への立入制限、遠隔授業の実施、諸行事の変更等の対応をとった。学生支援の分野では「全学生に対して漏れなく学修機会を提供すること」を最重要課題とし、SNSやWEB会議システムを活用した学生支援や窓口業務の遠隔化・電子化等に取り組み、平常時の業務の改善や非常時の対応能力の向上に繋がる経験を得た一方で、非常時の学生支援に関する脆弱性や課題が明らかとなった。本稿では、COVID-19に関する対応を開始した2020年1月から、大学構内への立入制限を解除した同年9月までの間の本学の学生支援の取り組みを報告し、同年7月に実施した緊急学生生活調査の結果等からコロナ禍が学生にもたらした影響を論述する。さらに、COVID-19に関する対応の経験を踏まえ、非常時における学生支援の課題として「大学IRと統合的な危機管理体制の構築」「組織と情報環境のレジリエンスの向上」「学生の危機管理能力の育成」の3点を提示する。

In response to the spread of COVID-19 in 2020, Shizuoka University of Art and Culture (hereinafter called SUAC) is working to prevent the spread of infection and ensure the safety of its members; restricting access to the university, shifting classes to online, and necessary changes are made to various events. In the field of Student Affairs, "to provide all students with learning opportunities" is the most important task. We support them through SNS and video conferencing platform and tried to reduce face—to—face contact by digitizing possible process. While gaining experience that will lead to improve student services and emergency response capabilities, vulnerabilities and issues became clear. In this paper, I will report on the student support at SUAC from January 2020 (when the actions against COVID-19 began), to September 2020 (when restrictions on access to university campuses were lifted). I will also explain the influence of the COVID-19 crisis on students from the results of the survey conducted in July 2020. Furthermore, based on the experience of the COVID-19 crisis, I would like to propose three points as follows: "to establish crisis management system with institutional research", "to improve resilience of organization and information environment", and "to develop student's risk management skills".

MEMO